

2020年6月14日 説教「ルベンを用いられた神」

創世記 37 章 12～24 節

ヨセフの見た夢の披露は、彼の人生に方向づけを与えていきます。

1. 使いで兄たちのところへ (12～16 節)

- ①父からのお使い (12～13) 「その後、兄たちはシェケムで父の羊の群れを飼うために出かけて行った。それで、イスラエルはヨセフに言った。『おまえの兄さんたちはシェケムで群れを飼っている。さあ、あの人たちのところに使いに行ってもらいたい。』すると答えた。『はい、まいります。』」兄達との関係が難しくなったヨセフ。もっとも彼自身は、それほど気にしている様子ではありません。父イスラエルから、兄たちが羊の群れを世話のために働いている地への使いを頼まれても、嫌な顔をする様子もありません。すぐに「はい」と言っているぐらいですから、ヨセフの側ではわだかまりはなかったと思われます。
- ②シェケムに (14) 「また言った。『さあ、行って兄さんたちや、羊の群れが無事であるかを見て、そのことを私に知らせに帰って来ておくれ。』」こうして彼をヘブロンから使いにやった。それで彼はシェケムに行った。」その用件とは羊の群れが無事であるかどうかを見てくるということです。それぐらいの用事をいいつけた父も、兄弟達との関係が良くなればという思惑もあったかもしれません。ヘブロンからシェケムまでの道は北へ 80 キロほどです。(地図参照)
- ③ひとりの人と会い (15～16) 「彼が野をさまよっていると、ひとりの人が彼に出会った。その人は尋ねて言った。『何を捜しているのですか。』」ヨセフは言った。『私は兄たちを捜しているところです。どこで群れを飼っているか教えてください。』」シェケムは、姉妹ディナが辱めを受けたことから、ヤコブとレアの子シメオンとレビがその町に仕返しをしたという日く付きの地です (34 章参照)。その地に着き、兄たちを捜していると、一人の親切な人が声をかけてくれました。

2. 兄たちのたくらみ (17～20 節)

- ①ドタンへの道(17) するとその人は言った。『ここから、もう立っていったはずですが。あの人たちが、ドタンのほうへ行こうではないか、と言っているのを私は聞いたからです。』そこでヨセフは兄たちのあとを追って行き、ドタンで彼らを見つけた。」事情を話すと、その人は、既に兄たちが出立していて、さらに北に 20 キロほどのところにあるドタンに行くと言っていたと教えてくれたのです。そこで、ヨセフはその地に向かってさらに進み、ようやく兄達を見つけたのです。
- ②殺そうとたくらみ(18) 「彼らは、ヨセフが彼らの近づくに、来ないうちに、はるかかなたに、彼を見て、彼を殺そうとたくらんだ。彼らは互いに言った。『見ろ。あの夢見る者がやってくる。』」それほど人が大勢いるわけではなかったでしょうから、向こうから人がやってくるとい



うことを兄たちもすぐに見つけました。それがヨセフであることもわかりました。その時に兄達の心に、憎い弟を殺害しようとするたくらみが浮かんだのです。「おい見ろよ、夢見る者がやって来たぞ!」。彼らから見れば、飛んで火に入る夏の虫でありました。

- ③今こそ彼を (19~20) 「さあ、今こそ彼を殺し、どこかの穴に投げ込んで、悪い獣が食い殺したと言おう。そして、あれの夢がどうなるかを見ようではないか。」殺して穴に投げ込んで、父親には悪い獣に食い殺されたと伝えようではないか。そうなれば、あいつの見た夢が空しいものであったかが、わかるだろうと言いつつ合ったのです。

3. 危うく命をとられそうに (21~24 節)

- ①ルベンは (21) 「しかし、ルベンはこれを聞き、彼らの手から彼を救い出そうとして、『あの子のいのちを打ってはならない。』と言った。」しかし、長男のルベンは異論を述べました。なんとしても、ヨセフの命を守らなければならないと思ったのです。それは父親の気持ちというものをより肌身に感じていたからでもありましょう。ヨセフを救い出し、あの子の命を取ってはならないと主張したのです。
- ②手を下してはならない (22) 「ルベンはさらに言った。『血を流してはならない。彼を荒野のこの穴に投げ込みなさい。彼に手を下してはならない。』ヨセフを彼らの手から救い出し、父のところに返すためであった。」ルベンは一つの案を出しました。ヨセフの血を流さずに、荒野にあった穴を指差して、この穴に投げ込んだらどうか、彼に手を出してはならないと強く伝えたのです。後で、穴から引き上げて、父親のところに連れて帰ろうと考えたのです。
- ③穴の中に (23~24) 「ヨセフは兄たちのところに来たとき、彼らはヨセフの長服、彼が着ていたそでつきの長服をはぎ取り、彼を捕らえて、穴の中に投げ込んだ。その穴はからで、その中に水はなかった。」ヨセフはようやくのことで、捜していた兄達の所に着いたのです。ところが、思いがけないことが起こりました。着くやいなや、兄たちから体を拘束されて、父親からプレゼントしてもらった大切な長服をはぎ取られ、穴の中に投げ込まれてしまったのです。その穴の中は空で、水はありませんでした。井戸としての穴で、本来ならば水が入っているはずでした。かつて、イサクは井戸をいくつも掘り、その度に水が出て祝福を得ました (26 章)。また、ヤコブがパダン・アラムに向かいラケルと出会った時もこのような井戸があって羊たちが水を飲んだことがありました (29 章)。

《結論》ヨセフの数奇な人生。それは、神が起こされていったと言えます。父イスラエル (ヤコブ) から愛されて育ちました。兄達から妬まれました。若いゆえに、兄弟に対する配慮に欠けた未熟なところもありました。兄弟達や親までもが彼にひれ伏すことを示すと思われる夢を、そのまま語ってしまうことなどはその一面でした。しかし、そこにもまた主の大きなご計画があったことが後からわかります。

ヨセフの波乱に富んだ人生がいよいよ始まります。父親のお使いとしてドタンにまで行ったヨセフ。兄達からすると、鼻持ちならない弟が、父の目の届かない所にやって来たのです。命を奪うチャンスの到来なのです。殺したくなるほどに、兄達の怒りや憎悪は深まっていたのです。もっとも、ヨセフ自身はその危険に気づいていませんでした。何といても、彼らはイスラエル (ヤコブ) を父とする兄弟たちなのですから。

今朝は歴史の中に働かれる主が、一人の人を用いて、ヨセフの人生の行き先を導かれた事を見ていきます。もし 10 人の兄弟達の内の一人が主張しなければ、ヨセフの命はこのドタンで終わっていたでしょう。兄弟達の多くはヨセフがやって来たのをみて、殺害しようとする血気は高まっていたのです。しかし、長男のルベンがヨセフを救おうとして「あの子のいのちを打ってはならない」「血は流してはならない」「彼に手を下してはならない」と、兄弟たちの企みの流れをくい止めたのです。他の兄弟達の反発を買うことを覚悟のうえで、体を張って暴挙を止めたのです。それゆえ、ヨセフは殺されず穴の中に投げ込まれることで済んだのです。思えば、ルベンは長男として生まれましたが、その人生に汚点がありました。それは父のそばめビルハの所に行って寝床を汚したことがあるのです (35:22)。そのことのゆえに、ルベンは長子の権利を失うことになってしまいます (I 歴代誌 5:1)。父イスラエルもこのことを知っていましたが、静かに事柄を見守っていました。そうしたことにも、主は働かれ、ヨセフの命の危険が訪れた時に、このルベンを用いてヨセフの命を守り、誰も想像もできないようなヨセフの人生を続いて導いていられるのです。

クリスチャンの人生は聖化されていくことを目指す歩みといえましょう。霊的成長をしていくことが日々の重要な課題です。一方で、その人生において、一つの出来事が本人あるいは周囲、あるいは社会の方向に影響を与えるような出来事に遭遇することがあります。本人は気が付かないで、そのような役割を果たしていることもあります。最後の晩餐の準備をするイエスの弟子達が、その場所に辿りつくのに用いられた「水がめを運ぶ男」(ルカ 22:10) はその一例でしょう。事柄の大小はともかく、御言葉に導かれながらの、行動や声掛けなどが、流れを変えたり、事柄を進めたりすることに用いられるかもしれません。ルベンのように、

私どもも主を見上げながら歩むときに、何かに貢献させられることがあるのです。何をするにも人に対してではなく、主に対してするように心からいていきましょう（コロサイ 3章 23節）。